

静岡県の自然系博物館への今後の取り組み (県企画部長との面会概要)

三宅 隆

静岡県では、静岡県総合計画「魅力ある”しずおか”2010年戦略プラン」後期5年計画の中に、

第1章の「環境の世紀」を拓く“持続可能な社会”づくりと第6章の未来を拓くために何ができる“意味ある人”づくりの2ヶ所に、短い文章ですが、自然系博物館の推進について記載されています。以下にその部分を引用します。

第1章 「環境の世紀」を拓く“持続可能な社会”づくり

6 環境保全活動の促進

(1) 環境教育 環境学習の推進

○環境教育 環境学習に必要な諸条件の整備及び推進体制の確立

環境に関する学習施設 設備と学習機会の充実を図るため、富士山こどもの国、浜名湖ガーデンパーク、田貫湖自然ふれあい塾、学校ビオトープの積極的な活用を努めるとともに、自然系博物館についての検討をすすめます。

第6章 未来を拓くために何ができる“意味ある人”づくり

5 地域社会における人づくりの推進

(3) 知識社会に対応する社会教育機会の充実 [施策の方向]

○図書館や自然系博物館の整備 充実

富士山、浜名湖、駿河湾など、本県の優れた自然を学び、研究する拠点になる自然系博物館の検討を進めます。

これらを踏まえて、今後の県の自然系博物館に対する取り組みについての見解を聞きたいと、5月12日に花森企画部長と面会しました。

当 NPO からの参加者は、池谷仙之理事長、伊藤通玄、高橋真弓、三宅 隆、湯浅保雄の各理事及び森 義之事務局員の6名でした。

1時間ほどの話の中で、概略ではありますが、

下記のようなことが確認されました。

○ あくまでも、花森企画部長の個人的な考えとの前提でしたが、現状では、展示施設より先に、収蔵庫の必要性、研究の必要性を重視し、アメリカのスミソニアン研究所のような、それぞれの分野に適した施設を先行する方がいいのではないかと。

さらに、収蔵、保存の施設としては、空き教室の活用も、考えられるとのこと。

場所の候補の一つとして、静岡市駿河区の日本平山麓の県有地などもあげられました。

○ 設立準備室や公式な委員会の設置については、現時点ではまだ難しいが、その前段階の企画部職員と、当 NPO との自然系博物館に関する勉強会は、実施してもらっても問題ないとの了承を得ました。

○ 現在、静岡県林業技術センターにある 100箱ほどの昆虫標本については、静岡市清水区辻の当保存事業所に移し管理することについて、進めていくことで了承を得ました。

以上、博物館建設に向けての大きな進展の声は聞かれませんでした。少しは希望の光は続いていきそうです。

なお、部長との会見前に面会した、当会会員でもある天野 一県議からは、今後共の協力を約束していただきました。さらに、今まで県議会でも何回も質問があるにもかかわらず、少しも進展していかないのは、議会軽視であるとの意見をいただきました。また、議会からの働きかけを強めるためにも、少しでも多くの県議に、サポート会員になってもらえるように協力をお願いしてきました。

スイスの川の近自然化

—チューリッヒ州の川づくりをまなぶ— (その1)

板井 隆彦

「近自然化」という言葉は、この総会に参加されている会員など一般の方にはなじまない言葉かと思います。まずこの言葉からご説明したいと思います。

私が静岡の大学へ着任したのは 1973 年のことです。もう 33 年も前のことになります。静岡にまいりましてすぐ安倍川の魚類調査に取りかかりました。建設省の都市環境整備事業の対象河川のひとつに安倍川が選ばれ、高水敷を公園とする計画がもちあがり、安倍川の生態調査のために、静岡大学の上野実朗先生をリーダーとした調査班が結成されました。魚類 底生動物を私どもが担当し 3 かにわたり調査を行いました。安倍川の中 下流域ではアユが最も重要と位置づけられ、その生息密度の推定も行いましたが、これには川水の透明度が必須で、藁科川の清沢を調査地を選びました。この調査地も年々透明度が悪くなっていきました。藁科川の河川工事がちょうど盛んになったのと平行しています。河川工事と魚の生息環境とを結びつけて考えるようになったのもこの頃からです。

安倍川の調査からつぎに大井川、狩野川の調査へと移り、やがて環境庁や静岡県の河川調査も担当することになりました。それらの成果は小著「静岡県の淡水魚類」としてまとめられましたが、この本の後半を読み直してみますと、すでに河川に生息する魚はさまざまな環境要因の悪化により減少していることがはっきりと指摘されています。この後金川直幸氏ら静岡淡水魚研究会員の協力を得て、およそ 10 年おきに総合的な魚類の生息調査を行い、その最新版の一部が「まもりたい静岡県の野生生物 動物編」としてまとめられています。静岡県版レッドデータブックです。

静岡県のレッドデータブックでは、県産の魚 166 種のうち、評価対象とした 106 種のうちの 16 種が絶滅の恐れがあると判定され、これは対象魚種の 16%にあたります。国のレッドデータ

●川の荒廃

●水質汚濁

事業所の排水 家庭下水、肥料・農薬、水産排水

●生息場所の破壊

河川横断工作物の設置 (ダム・堰その他の落差工など)
魚とくに回遊魚の移動を阻害

●河川改修

直線化：淵・早瀬における魚の生息・越冬場所の消滅
堤防・護岸の敷設で支川や細流との連絡性が分断：
魚の産卵場所などへの移動を阻害
川岸の植生の喪失で河川生物の生息場所の重要な基質が喪失し単調化

●その他の整備

河川の埋め立て 暗渠化 護岸のコンクリート化 (U字溝整備)

●外来種の移入

外国からの移入種 (*特定外来種等) 内地産移入種

図1 絶滅の危機に瀕する淡水魚
ブックに記された絶滅危惧の原因

ブックでは 272 種のうち 76 種が絶滅危惧種で 28%にもなりますから、静岡県ではこれに比べればいくらかましということになります。

静岡県のレッドデータブックに記された絶滅危惧の原因と推定される要因は、図1にあげたようなものです。水質汚濁、河川横断工作物の設置や河川改修などによる生息場所の破壊といった川(や池)の荒廃のほか、外来種の移入によるものもあります。もちろん、川や池がこんなにも荒廃した理由はこれらが身近な自然として存在し、埋め立てや改修が都市から都市近郊へさらには農村へと広がっていったからにはほかなりません。こうして淡水魚の生息場所の荒廃は日本全国に広がり、そこに生息する魚の多くが絶滅の危機にさらされるようになってしまったのです。

この荒廃した川の環境の回復のひとつの手段として登場してきたのが「多自然型川づくり」です。この川づくりは建設省の河川局長の通達により 1990 年から全国一斉に取り組みされるようになりました。この手本となったのが、スイスのチューリッヒ州の技師クリスティアン・ゲ

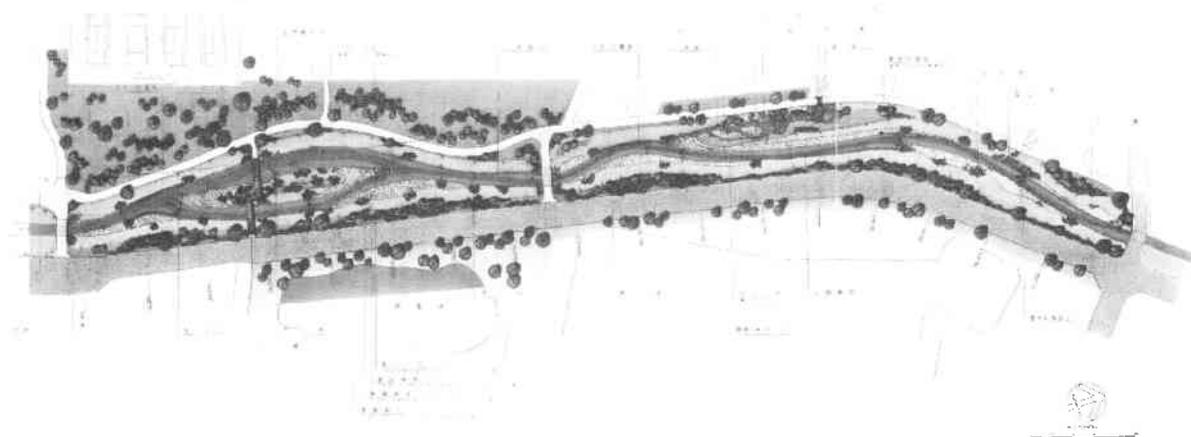


図2 浅畑川の川づくりの設計図

ルディー氏らによって取り組まれた **Naturnaher Wasserbau** なのです。これが日本の福留侑文氏やスイスの山脇正俊氏らによって「近自然河川工法」と訳されて日本に紹介され、「多自然型川づくり」の原型となりました。この近自然的な工法は河川にとどまらず、やがて道路や街づくりへも広がりを見せるようになり、山脇はこういった行為を「近自然化」とよぶようになったのです（山脇, 2000, 2004）。

静岡県では、河川整備が上流から下流、多くの支流まで進められている静岡市の巴川の支流浅畑川においていち早くこの川づくりが取り組まれました。静岡土木事務所の富野章さんの設計で、1992年に着手、1994年に竣工しました（図2）。実際の川づくりの長さは計画の半分ほどで終わりましたが、スイスやドイツの近自然河川工法の趣旨をよく酌んで、蛇行を取り入れ、最小限の人為的介入にとどめ、あとは川が自ずから川をつくる力に任せる方法がとられました。当時の先行的な多自然型川づくりの例としては、横浜市のいたち川や山口市の一の坂川などがありましたが、多自然とは名ばかりで自然の保全や復元にあまり寄与していないと見なされるものがほとんどでした。

浅畑川の取り組みは明らかに他の事例と異なっているように見え、板井は工事の施工途中からこの川の川づくり区間における自然再生過程について底生動物や魚類などの小動物を指標として追跡する調査に取り組みました。この調査は約10年継続的に取り組み、その後いくらか間を置きながら現在もなお続けています。その結果だけをいえば、自然環境の復元は

不十分なものでした。当初数年は環境の多様化とともに小動物は多様度や繁栄度は上昇していったのですが、途中でスズメノヒエ類の妨害植生の繁茂により逆に低下し、そのまま停滞してしまうようになったのです。この事業のどこが問題だったのか、本もとのスイスやドイツではどうなのかが気になりました（図3）。

2001年に杉山恵一さんを団長とする自然環境復元協会の調査団がスイス・ドイツの河川や湖沼の自然環境復元の海外研修が企画され、私はこれに参加しました。この研修では川づくりから道路造りまで、スイスやドイツの自然と人の暮らしの調和を目指す近自然化に関して目を見張る思いをいたしました。一方では不満がずいぶん残りました。その不満を改修するべく、昨年（2005年）改めてスイス・チューリッヒ州を訪れました。（以下次号）

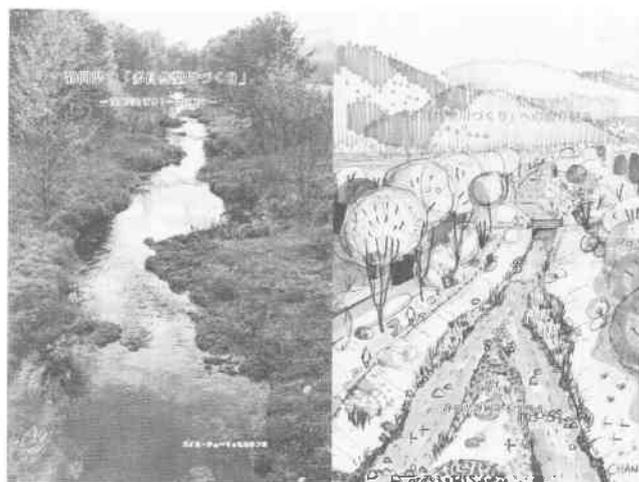


図3 スイスやドイツの近自然化された川の実際はどうなのか？

興津川上流黒川自然観察会

大貴 貴清



自然観察会の説明のようす



黒川林道での昆虫採集

5月14日(日)、晴天のもと、静岡昆虫同好会との共催で興津川上流の黒川自然観察会を実施しました。黒川のせせらぎ広場木造アーチ前に現地集合し、まず昆虫採集を行うことになりました。

参加者の方は蝶屋さんが殆どで、皆さん思い思いに花壇や植え込みに集まる蝶を採集されていました。この日はアゲハチョウの仲間が多く、ジャコウアゲハ、オナガアゲハ、カラスアゲハ、クロアゲハなどが多く飛んでいました。しかし、僕は雑昆虫・陸貝好きですので、皆さんが蝶を追いかけるのを尻目に石の下、木の葉の上、ガードレールなどを丹念に探し回りました。石の下はゴミムシ狙いでしたが、この日は殆どいませんでしたので、葉の上にいるハムシ・ゾウムシ系に狙いを定めました。

この時期この辺ではおなじみのカツオゾウムシの仲間(おそらくオオカツオゾウムシ)やヒゲボソゾウムシ(リンゴコフキゾウムシ?やツチイロヒゲボソゾウムシ)の仲間、アオハムシダマシが多くいました。少し進んだ沢沿いの木の葉状ではヒメコブオトシブミや、チビタマムシの仲間(ソーンダースチビタマムシ?)があり、なかなか良い感じです。

山とは反対側のガードレールにはクズとおほしきマメ科植物が繁茂しており、大量のマル

カメムシが吸汁しています。それに紛れてホシハラビロヘリカメムシやオオツマキヘリカメムシといったヘリカメムシ系、セスジナガカメムシやチャモンナガカメムシといったナガカメ系も採集できました。また日当たりが良いせいかイタドリが生えており、案の定イタドリハムシグットです。

この間にも並行して陸貝採集も行いましたが、殆どハコネマイマイの0234型でオオケマイマイが多少採れる程度でした。変わったところではカントウベッコウマイマイが3個体採集できました。この貝は、外套膜で殻を覆うというまるで海産のタカラガイのような事をする貝です。乾燥に弱いせいか、大雨の後などによく低木や草などにくっ付いています。

さらに山道を進んで行き、葉状にいるハムシを探しましたが、カメノコハムシ系を同時に2種採集しました(イチモンジカメノコ、コガタカメノコ)。またベニボタルの一種やクロジョウカイ、ツノカメムシ2種(エサキモンキツノ、セアカツノ)も追加しました。

蝶屋さんの方々は移動が早いので、一人取り残されていましたが、しばらくすると折り返してきたので、僕も途中で折り返し、フジハムシや微小なゾウムシ・ハムシの類を採集しながら山を降りました。途中の橋の欄干ではアト



水生昆虫の観察会

モンサビカミキリを1頭採集しました。

再び黒川せせらぎ広場に戻ると、皆さん昼食をとっておりましたが、ここで雑昆虫好きの私としてはやる事があります。ここには竹林があり、季節柄竹の子が生えています。そこで途中で折れた竹の子などは腐って、絶好の雑昆虫採集スポットと化すわけです。

早速腐った竹の子の皮をはぐっておりますと、おられました！エンマムシの仲間やハネカクシの仲間が！もうとにかく宝の山といった感じでしたが、周囲の方々からは非常に奇異の目で見られました。ここでしばらく採集していると、なにやら高速で動く物体があります。よくよく目を凝らすと、果たしてそれは大きなハネカクシでした。何と云うか迷彩色で錆びた感じの素晴らしく格好の良いハネカクシ…。後

で調べた所その名もサビハネカクシというやつでしたが、もう余りの格好よさに夢中で採集していました。あまりに狂ったように採集していたので一般の観光客から何をしているかと問われ、苦し紛れに研究のために採集しているなどと適当に答えましたが…。

午後からは、黒川で川の生き物の観察会を行いました。子供たちも川に入り、思い思いの場所で網を入れていました。

今の時期は、水生昆虫が次々と羽化するので、羽化直前のカワゲラやカゲロウの大型の幼虫が非常にたくさん採集できました。特に流芯近くの石をひっくり返すとオオヤマカワゲラやヒゲナガカフトビケラの巨大な個体が一網で10個体近くも入りました。カゲロウでは、岸近くの草などに網を入れるとチラカゲロウやモンカゲロウなどの大型個体が入りました。

魚は、アマゴ、アブラハヤ、タカハヤ、ヌマムツなど、それ以外の生物では、カジカガエル、イモリ、サワガニ、ヒキガエルのオタマジャクシなどが採集されました。

黒川近辺は、清水の市街地からも近く、とても手軽に行ける場所ですが、自然度がとても高く、山も川も色々な生物が生息しており採集や観察にはとてもよい場所です。是非休みの日などには遊びに行かれる事をお勧めします。ただし、大雨の後などは川が増水して流れもとても速くなっていますので気をつけましょう。



“三二自然史博物館” 開催のお知らせ

2004年度より自然教育事業として行われてきた三二自然史博物館を今年も夏休みを利用し、開催することになりました。この催しは、静岡県自然学習資料保存事業を広く知っていただき、一般の方々に県立自然史博物館の必要性を理解していただくために行うものです。

展示内容の詳細はまだ決まってはいませんが、自然学習資料保存事業室の標本室の見学や自然観察会、体験学習コーナー、夏休みの自由研究の相談などをあわせて行う予定です。

期 間：平成18年8月21日（月）～27日（日） 開催時間：毎日午前10時～午後5時

場 所：静岡県静岡市清水区辻4丁目4-11 中部健康福祉センター庵原分庁舎内3F

お問い合わせ先：0543-67-2111 E-mail bureau@spmnh.jp

静岡県の哺乳類 (5)

ヒナコウモリ

三宅 隆



県内 100 年以上ぶりの記録

静岡県内でのヒナコウモリの記録は、鳥居春巳氏著「静岡県の哺乳類」1989年、第一法規発行によると、野部村（現豊岡村）や富士山須走などで捕獲されているものの、いずれも1889年～1891年の古いものであると記載されている。

私を含めた静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会員は、1998年から5年間、静岡県版レッドデータブック作成の為に、精力的に現地調査を実施したが、何しろコウモリの捕獲は難しく、ついはその生息は確認できなかった。そして、静岡のレッドリストでは、ヒナコウモリは、要注目種のN-III（部会注目種 各専門部会において、学術上・自然保護上注目すべきと判断された種）にリストされ、今後の確認に任されることとなった。そして、静岡県版レッドデータブックは2004年3月に発刊された。

ところが、実はその1年前の2003年4月11日に、富士宮市麓の朝霧高原にある、東京農業大学富士畜産農場の富士山寮で、窓ガラスにへばりついていたヒナコウモリが、学生により発見されていたのである。このことを、知ったのは、ずっと後のことだったため、残念ながら記載できなかったのだが、実に112年ぶりの確認であった。

一度確認されると、偶然は続くものらしい。翌2005年8月27日、静岡市井川の県民の森で、ウサギコウモリの行動調査をしていた、日本大学の学生のカスミ網にかかったのである。情報をもらいすぐに現地に駆けつけ、私にとってはヒナコウモリとの初めての対面となった。

そして、2006年3月5日、当会会員でもある足立さんから、焼津の花沢の里で、コウモリの死体を拾ったという情報がもたらされた。冷凍を頼んで、後日確認したところ、これがヒナコウモリだったのである。まだ、飛び回るには寒いこの時期に、どうしてこんな所にいたのか判らないことだらけではあるが、この個体は、将来の県立自然史博物館の為に資料として、剥製にして保存したいと考えている。

県内では、今までに14種類のコウモリが確認されているが、まだまだ確認されていないコウモリも多い。今後とも地道な調査を継続し、この次は、県内では1886年に豊岡村で記録のあったチチブコウモリに、ぜひ出会いたいものである。

静岡県の淡水生物 (6)
ホトケドジョウ
足立京子



ホトケドジョウ (*Lefua costata echigonia*) は流れが緩やかな細い流れの砂泥底の水草の隙間を遊泳し、生活場所は中層が中心です。これはドジョウの中では浮き袋が発達していることと関連があると思われます。単独で遊泳するケースが多く、産卵行動以外は群泳する事はありません。食性は、水草に付着するミズムシやサカマキガイなどの幼体や砂泥の中の小動物も食べます。外見の特徴は、大きくても10cmくらい。ぽてっと太く腹の中心が赤く、4対のヒゲのうち1対が角のように見えます。行動は体型が語るように俊敏ではありません。そのため、他の魚を避け細い流れを好みます。産卵期は3月下旬から6月上旬とされていますが、県中部では11月下旬に産卵が確認された事があります。産卵期は2から4匹のオスが1匹のメスを追いかけて泳ぎます。産卵場所は流れがほとんど無く、浅い場所の植物に放卵します。水田に移動できる環境下では、水田と畦との水際の植物に放卵します。卵は1mmほどの白く小さい球形で、2、3日で孵化します。

静岡県のホトケドジョウは、静岡県版レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。西部は絶滅危惧Ⅱ類、中部、東部は絶滅危惧ⅠA類。伊豆では絶滅となっています。

ホトケドジョウを水槽飼育した体験のある方は、簡単に増えると言います。では、なぜ絶滅が危惧されるようになってしまったのか考えてみますと、まず、ホトケドジョウが生息する条件としては、針葉樹林だけの山ではなく、広葉樹の落ち葉などが堆積し吸水性を持つ豊かな土を持つ山からの湧水かしみだし水があることが一番大切です。その岸には隠れ場所となる草や古いコンクリートの割れ目などの空間があり、川底にはやわらかな泥と落ち葉もある程度必要です。こんな条件の整ったところにたくさんいる印象を受けます。

さらに、細い流れという条件が加わると生息場所は、かなり限定されてしまいます。それを考えるとホトケドジョウがいるということのすばらしさが分かってきます。

しかしながら、このような生息環境は、崩れやすくヒトが汚いと感じるようです。真っ先に河川改修の対象となります。ホトケドジョウが安心して棲める環境が無くなったことが絶滅危惧種になってしまった理由です。

ホトケドジョウのいるような河川の改修には十分な配慮をしていただきたいと思います。

御前崎 磯の自然観察会

大貫 貴清



御前崎での観察会をはじめます



ウミガメの死骸



磯にどんな生物がいるかな



潮溜まりの生物の説明

3月19日(日)、晴天の中、御前崎「磯の自然観察会」が実施されました。この日は朝9時に静岡駅より出発し、御前崎灯台下駐車場に11時位に集合しました。当日、現地は非常に風が強く、資料なども飛ばされそうで大変でしたが、はじめに駐車場で説明を行い、磯での採集となりました。この日の干潮は13時44分でしたが、すでに磯は潮が引き始めており所々に潮溜まりが見られました。

まず砂浜にどのようなものが打ちあがっているかを観察しました。砂浜には様々な貝殻や魚などの死骸が打ちあがっていましたが、特筆すべきものとしては殆ど甲羅だけになったウミガメの死骸が打ちあがっていました。御前崎は静岡県下でも有数のウミガメの産卵場とな

っており、夏にはたくさんのウミガメが砂浜に集まり、産卵をします。当然この沿岸にもウミガメは多く生息していると思われ、それを思わせるような漂着物でした。

その後、実際に磯に入り生物の採集となりましたが、初めにも書いたように風が強く、滑って転ばないように注意が必要でした。まず目を引いたのは磯の干出した所に見られる黄色い渦巻きのような物体です。渦巻きと言っても立体的なゼリーのようなものが渦を巻いているもので大きさは直径2cmくらいでしょうか。これはカラマツガイと言う貝の卵のうで、このように水面よりも上で産卵が行なわれるようです。この貝は有肺類とよばれる仲間で、皆さんおなじみのカタツムリの仲間と言えば分かりやす

いでしょうか。

潮溜まりの中を覗いてみると、アメフラシやムラサキウニ、ホンヤドカリ、ヒライソガニといった生物が動いているのが分かります。少し水深の深い所に網を入れると沢山のエビが入りました。ここで取れたエビはイソスジエビとアシナガモエビという2種類でした。また魚ではアカオビシマハゼというハゼの仲間が多くとれました。

今度は、砂利ごと網ですくってみると、砂利の間に細長い魚が動いているのが分かります。これは、やはりハゼの仲間コマハゼとオオミズハゼの若魚でした。また大きな10cm位のウナギを平たくしたような褐色の魚もいます。

これはカズナギというギンポに近い魚でした。またアナハゼというカジカに近い魚も採れました。砂浜の砂利の中からはスナホリムシやヨコエビの仲間といった甲殻類も採集する事が出来ました。

既に干上がった岩の間には、イワガニやマツバガイ、数種類のフジツボの仲間も観察できました。またこの磯は岩盤になっていますが、その岩盤に穴をあけて生活するカモメガイという二枚貝も観察できました。このあたりは、秋口になると黒潮に乗ってやってきた熱帯魚の稚魚も多く見られるようです。ぜひ、転んだりしないよう気をつけながら皆さんも訪れてみてください。

自然博ネット海外ツアーのご案内

モンゴルゴビで 恐竜足跡化石を探す旅



荒涼としたゴビと地平線

モンゴルのゴビ砂漠に恐竜の足跡化石を探しに行くツアーです。以下の要領で実施します。参加希望の方はジオプランニング（電話・Fax 03-3984-1226）までお問い合わせ、またはお申込みください。

旅行日程 9月9日（土）～9月16日（土）

出発 成田空港 13:30 帰着 12:30

旅行費用 約250,000円

ウランバートルから四輪駆動で南南東に下

り、シャツアフ付近まで行き、その間の地質や自然を観察して引き返します。シャツアフ付近では恐竜化石、とくに恐竜の足跡化石を探します。旅程では、モンゴルの自然はもちろん遊牧民の生活など体験できます。

詳細は、以下のホームページをご覧ください。
<http://www.dino.or.jp/mongol/motr2006.html>

東アフリカ ケニアの自然観察の旅

ケニアのアンボセリやナクール湖、マサイマラ国立公園で、ヌーの川渡りや、ライオン、キリン、アフリカゾウなどの哺乳類、ダチョウやフラミンゴの大群、ハタオリドリなどの鳥類を観察しましょう。動物写真家の内山 晟氏の案内で、楽しい旅行になること請け合いです。

期 日：平成18年10月6日（金）

深夜 関空発～10月15日（日）

費 用：約460,000円

興味のある方には、詳細資料を送ります。連絡ください。連絡は、事務局へのメール（bureau@spmn.jp）または辻事業所（0543-67-2111）三宅まで。

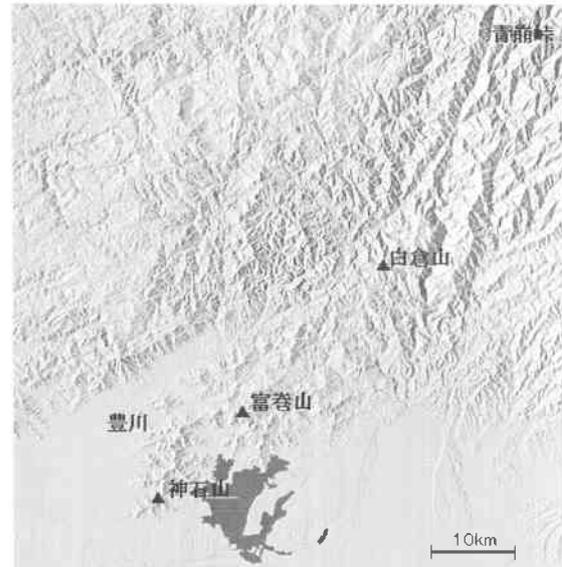
中央構造線沿いの一等三角点

奥石 邦昭

日本列島の西半分を南北に分ける大断層である中央構造線は、長野県諏訪湖の南から南下して、静岡県北西部の青崩峠から県内に入り佐久間を通り、さらに愛知県の豊川から三河湾を通過して渥美半島の伊良湖岬から西方に転じて、紀伊半島、四国を横断して九州に抜けている。この断層を境に北側は片麻岩や花崗岩からなる領家帯が、また南側は結晶片岩からなる三波川帯、火山岩や貫入岩からなる御荷鉾(みかぶ)帯、頁岩や砂岩からなる秩父帯が帯状に分布している。3つの一等三角点はこの構造線の南側に沿って、北から白倉山(1027.1m)、富幕山(563.2m)、神石山(324.7m)にある(図1)。

1) 白倉山は、秋葉ダムの北西 6.5 km の旧龍山村と旧佐久間町の境界に位置する。国道 152 号線の旧龍山村役場から白倉川沿いに県道 361 号線を進み、「もみじの里 白倉峡」の看板の先 1.2 km を右折して、さらに 2.2 km ほど林道に入ると T 字路となる。ここを左折して約 1.3 km 行ったところが白倉山の登山口である。天竜杉の美林中、40 分ほどで稜線に至り、右へ急登すれば約 10 分で白倉山の山頂にでる。山頂からの眺望はきかないので、東方約 5 分のところの遠州灘展望ポイントがよい。天竜川の両岸に広がる磐田原や三方原の台地、浜名湖が遠望できる。帰路の白倉峡では、川底の小石から周囲の巨岩まで、三波川変成岩の色合や褶曲模様などさまざまな岩石の表情を楽しめる。北方約 32 km の青崩峠では、領家帯のホルンフェルスが見られる。ここには、5299 一等水準点標石(標高 1082.4634m)もある。

2) 富幕山(とんまくやま)は、天竜浜名湖鉄道三ヶ日駅の北東約 6 km の旧三ヶ日町と旧引佐町、愛知県新城市との境界に位置する。臨濟宗方広寺の大本山がある奥山高原を登りつめたところが奥浜名自然遊歩道奥山コースの入口で、稜線を徒歩 50 分ほどで富巻山(とんまきやま)一等三角点の標石が埋設された山頂にでる。山頂からは遠州灘や浜名湖が眺望できる。帰路、竜ヶ岩鍾乳洞や付近の自然の造形カレンフェルトを楽しむのもよい。竜ヶ石山(359



中央構造線沿いの一等三角点(右上から左下に「ノ」字型をした大断層の中央構造線は地形にもよく現れている)

m) ^は、竜ヶ岩洞の入口近くにある林道の 2 km 先の登山口から約 20 分である。また、三ヶ日原人が出土したという只木遺跡やワニやナウマンゾウなどが発掘された谷下の石灰岩採掘跡に佇むと「カルシウムはカルシウムを護る」ということが実感できるだろう。

3) 神石山は、浜名湖の西、湖西連峰の一主峰で、湖西市と豊橋市の境界に位置する。東海道線新所原駅の北方約 1.5 km の新池が登山口である。15 分ほどで梅田峠に至り、嵩山展望台では、三方原の台地、浜名湖の今切口、旧天竜川の氾濫原であった天伯原の台地、小河川の入り組んだ沖積平野が一望できる。過去 30 万年にさかのぼって台地や浜名湖の成り立ちを思い描きながら眺めていると興味が尽きない。梅田峠からはヤブツバキが繁る尾根を 50 分ほどで神石山の山頂にでる。東面が開いているので浜名湖が望見できる。帰路、嵩山北西 0.6 km の神座のトキワマンサクの群生地を訪れるとよい。日本では熊本県小岱山(しょうだいさん)と三重県伊勢神宮とここの 3ヶ所しか発見されてないという珍しいものである。尚、県道 334 号線沿いのトキワマンサク見学者駐車場に案内板がある。

故小川賢之輔氏の文献等資料

横山 謙二

静岡県学習資料保存事業室では現在、2004年（平成16年）2月10日に逝去された小川賢之輔先生の蔵書と研究資料を整理しております。小川先生の蔵書はおよそ700冊、その他研究資料が1000点にもおよびます。

まだ整理の途中ですが、文献には日本貝類学会、日本地質学会、日本古生物学会、日本火山学会、日本地理学会、日本第四紀学会など多分野にわたる学会の学術雑誌があり、今では手に入れにくい古い文献や絶版になった貴重な専門書、自然科学系の普及図書などが多数あり、小川先生の執筆出版物も含まれています。また、小川先生の研究資料にはニューギニアの貝類の研究や富士山・愛鷹地域の地質調査のデータなどがあり、報告書や論文に使われた原図なども含まれています。こうした研究資料の中には、静岡県地質、特に富士・愛鷹地域に関する研究資料が多く、将来の地質学者にとっては貴重な資料になることは間違いのないでしょう。この文献やよび研究資料は、まさに静岡県の地質に関する小川先生からの私たちへの遺産と感じて整理させていただいています。

小川賢之輔先生は、1911年（明治44年）3月5日に静岡県富士郡鷹岡村天間に生まれ、1931年（昭和6年）静岡県静岡師範学校専攻科を卒業され、富士郡大淵村立尋常高等小学校訓導に奉職しました。その後、東京都へ出向され、東京市墨田第二小学校および向島木下川小学校に勤務され、同時に海軍ニューギニア学術探検隊地質調査員および東京科学博物館学芸官補を兼務されたそうです。

戦後は郷里の静岡県に帰り、静岡県吉原町立今泉国民学校や吉原中学校に勤務され、1954年（昭和29年）に富士郡柚野村立柚野小学校の校長になられ、以後、吉原市立須津中学校、元吉原中学校、長泉町立長泉中学校、富士市立須津中学校の校長を歴任されました。定年されてからも愛鷹山麓地域の自然環境保全と土地利用計画調査員や富士市自然調査研究会会長



小川先生の文献資料などの書架と整理のようす

などを務められるかたわら、野外での地質調査や後輩の指導を継続されておられました。また、文献や研究資料もきちんと整理されていて、資料がすぐにでも活用できる状態にあります。

小川賢之輔先生の著作学術論文および出版物としては、代表的なものとして以下のものがあります。

- 愛鷹山（1962）吉原市教育委員会
- 駿河湾北部に発達する田子浦砂丘の研究（1965）
地理学評論
- 富士山周辺地質岩石の研究（1965）静岡県出版文化会
- 富士火山三島溶岩流末端付近の溶岩塚群（1973）
地質学雑誌
- 富士愛鷹山麓地域自然環境（1974）富士市
- 東海自然歩道の地学案内（1976）（）静岡県地学会
- 静岡の地学（1976）静岡県出版文化会
- 富士市の自然（1976）富士市
- 富士宮市の自然（1988）富士宮市

この文献資料の受入には小川先生のご遺族と篠ヶ瀬卓二氏、斉藤朗三氏にご協力をいただきました。本文献資料については、NPO自然博ネットでお預かりして整理していますが、整理終了後に静岡県の自然学習資料として寄贈の手続きをとらせていただきます。なお、小川先生の略歴については篠ヶ瀬卓二氏に資料をいただきました。